

文化

戯れる「永遠の童」

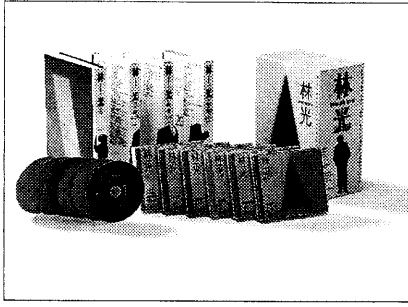
林光、CDに足跡を凝縮



社会と現代作曲家の距離はいつから、どうしてこんなに広がってしまったのか。作曲家、林光の足跡をたどるCDボックス「林光の音楽」（小学館）Ⅱ写真Ⅱで、時代のうつろいと大衆の感性に寄り添

ってきた楽曲の数々に触れ、つい考えこまずにいられたかった。

歌曲、オペラ、映画音楽、校歌、ラジオ音楽を含む20枚のCDと400頁超の解説書から浮かび上がるのは、モダンジャズにキャバレーソング、ラフマニノフにショスタコーピチなど、あらゆる時代の音楽言語をわがものにして戯れる「永遠の童」の姿だ。曲を提供した映画は約13



0本で、映画監督の新藤兼人とは59年の「第五福竜丸」以来の盟友。ハンス・アイスラーへのオマージュ「ヘナチ」ニモマケズ」や合唱組曲「原爆小景」など、メッセーじ性の強い作品も少なくない。他ジャンルのクリエイターとの仕事に生きる道を謙虚に見いだしてきた人だからこそのがりが、ここにはある。

林は今年で77歳。同世代には武満徹、黛敏郎、松村禎三、指揮者なら岩城宏之に山本直純、外山雄三といった人々がいる。軍歌に耳をそばだてながら幼少期を過ごし、進駐軍相手にピアノを弾き、西洋音楽をやる意味を「に問いかけながら道なき道をひたすら歩んでいた世代。多くがすでに世を去ったが、林は日本のクラシック史における「青春時代」を疾走してきた、まさにそのひとりなのだ。

時代を追って林の作品を聴くと、この世代特有の反骨精神や社会への視線が、東京芸大中退直後に書いた「交響曲

ト調」（53年）の頃からまったく揺らいでいないことに気付く。

加藤泰監督「真田風雲録」（63年）の「真田隊マーチ」も象徴的だ。どこかやけっぱちな歌詞に付された、戦争の幻影をおぼろげに残す軍歌調の旋律には、60年安保時代の若者の実直さ、迷い、弱さ、すべての感情がびっしりと絡みついている。音楽は常に社会のうごめきから生まれ来るという林の内なる主張が、通奏低音のように響いてくる。

いわゆる現代作曲家が大衆文化と切り離され、社会と切り結ぶ強度を持った作品に出あうことがそう簡単ではなくなってしまう今、林はメディアの商業主義ともたもとを分かち、手兵の「オペラシアターこんやく座」と軽やかに自らの歌を歌い続けている。その変わらぬ矜持は、芸術と社会の溝がどんどん深まってゆくさまを、冷徹なまでに照射しているような気がしてならない。（吉田純子）